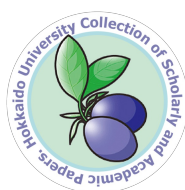




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アルタイ諸言語の場所表現における名詞的性格について
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	北方言語研究, 9, 41-65
Issue Date	2019-03-15
DOI	https://doi.org/10.14943/88222
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73724
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_kazama.pdf



アルタイ諸言語の場所表現における名詞的性格について

風 間 伸 次 郎
(東京外国語大学)

キーワード：アルタイ諸言語、場所名詞、格、トコロ性、後置詞、聞き出し

0. はじめに

本稿は、アルタイ諸言語の場所を示す語の名詞的／文法項的な性格について、3つの言語からエリシテーションによりデータを集め、その結果を日本語とも対照しつつ考察するものである。対象とする言語は、アルタイ諸言語のうち、ツングース諸語からはナナイ語を、モンゴル諸語からはモンゴル語ハルハ方言（以下では単に「モンゴル語」と呼ぶ）を、チュルク諸語からはトルコ語を取り上げることにする。なおモンゴル語は梅谷 (2008) の方式により翻字した。

本稿は大きく第1部と第2部に分かれている。第1部では主に場所を示す語以外の語の場所性について検討する。具体的には、場所の指示詞や疑問詞の名詞的／文法項的性格と、人間や物の場所化の必要性の有無について調べる。すなわち「ここはどこ？」のような表現が可能かどうか、「私のところへ来て！」と言わなければならないか、それとも「私へ来て！」のような表現が可能か、という問題である。

第2部では逆に「前、後ろ、上、下、中、外、間、横」など、相対的な場所を示す語の名詞的性格を問題にする。すなわち、日本語の「前」は「～の前に」のように、前の名詞に属格を要求し、それ自身は格をとるなど、きわめて名詞的な性格を示すのだが、他の言語でも上記のような意味の語が同じように名詞的な性格を示すのかどうかを検討する。実際には、アルタイ諸言語のこうした意味の語には、日本語に比べると（特に語によっては）完全に名詞的な性格を示さず、かなり副詞的／後置詞的な性格を示すものがある。なお第2部ではこのような語を「場所語」と呼ぶことにする。

第1部

1. 先行研究

1.1. 場所を示す語（／句）における文法項的性格と副詞項的性格（およびその連続性）

日本語では主に目的語を示す格である「を」が、「空を飛ぶ」、「部屋を出る」のように通り道や起点などの場所も示す。逆に、主に存在の場所を示す格である「に」は、間接目的語や、所有文および感情述語文などの統語的主語も示す（「あの人にあげる」「あの人には車が二台ある」「あの人にはイタリア語がわかる」）。したがっていわゆる文法項と副詞項は連続している面があり、日本語における場所を示す語は、多分に文法項的性格を持っているものと考えたい¹。

筆者の知る限り、類型的に日本語とよく似た文法的特徴を多く示す言語においても、場

¹ 風間 (forthcoming) では、SOV 語順の言語に与格主語の多いことについて論じている。

所を表すいくつかの格が一定の動詞によって支配されて「文型」をなすとみなされている。例えばモンゴル語について山口 (1980)、トルコ語について Göksel and Kerslake (2005: 128) を参照されたい。Nose (2006) は Iggesen (2005) [WALS の 49] の扱う 261 の言語のうち 10 以上の格を持つ 24 言語について特に検討を行い、豊富な格を持つ言語は、①場所の格 (on, in, by, below, under, along などのような) や副詞的な格を多く持ち、②SOV 語順を取る傾向にある (SOV は 9 言語、SVO は 4 言語、自由語順は 6 言語、その他の語順は 5 言語)、としている。Iggesen (2005) は、格の多い言語は中央アジアから北アジアに分布し、これは北米のエスキモー語へと続いているとし、顕著な地理的偏りがあるとみている。

田窪 (1984: 91) は、日本語には「場所」を表す分析的でない²疑問代名詞、指示詞が存在するが、英語の “where”, “here, there” は副詞であることを指摘している。

私はここが好きだ。／ I like it here. ・ I like this place. ・ *I like here.

さらに次のような日英の対照により、英語では関連する名詞が何であろうと、疑問詞は場所の副詞として機能する場合にのみ用いられるとし、それ以外の場合には “what”, “thing”, “who”, が対応するとしている。

日本の首都はどこですか。／ **What** is the capital of Japan?

神戸大学はどこですか。／ **Where** is Kobe University?

(店は) どこもあいていない。／ **Nothing** is open today.

どこが勝ちましたか。／ **Who** won?

筆者の知る限り、トルコ語でも、場所を示す疑問詞や代名詞が文法項的な性格を持っている。

(1) Bura-sı nere-si?
here-3SG.POSS where-3SG.POSS 「ここはどこか？」 (林 (2013: 92))

(2) Nere-m-i sev-iyor-sun?
where-1SG.POSS-ACC love-PRS-2SG 「私のどこが好き？」 (林 (2013: 78))

ただしトルコ語では、(1) にみるように必ず 3 人称の所有人称接辞が必要であり、この点では日本語に比べ名詞性が低い。

1. 2. 名詞における場所／非場所の区別

場所を示す語の名詞的性格から考えられる帰結 (つまり関連する類型的特徴) はいくつかある。例えば、田窪 (1984: 91) ではまず次のような例を挙げて、英語に対して日本語では「場所」と「非場所」が明確に区別されるとしている。

I went to the door. / *私はドアに行った

これは一つには、文法項にも場所項にも同じ格助詞を用いるために、名詞の側でそれが場所なのかそうでないのかを明示する必要がある、という点に起因すると考えられる。

² 田窪 (1984) は「無契の」という語を用いている。

同様のことは既に別の観点から寺村 (1968) が取り上げている。すなわち、日本語の名詞は「トコロ性」によって分類される。トコロ性のある名詞（例えば「学校」）であれば、「学校へ来る」といえるが、トコロ性のない名詞（例えば「オレ」）では「*オレへ来る」のように言うことはできない。こうした場合に、日本語では「オレの {ところ／前／横／そば} へ来る」のように場所化する必要がある。現在筆者の知る限りでは、中国語にも同様の制限と場所化が観察される（藤堂・相原 (1985: 83)）。

2. 調査方法

コンサルタントより聞き出し（elicitation）による調査を行った。コンサルタントの情報は以下の通りである。

表 1：コンサルタントの情報

言語	生年	出身地
トルコ語	1981	イスタンブール
モンゴル語	1991	ウランバートル
ナナイ語	1937	ハバロフスク州ナイヒン村

まず、場所の名詞的性格／文法項的性格を調べるため、[1]「ここはどこ？」（コピュラ文の主語・述語）、[2]「あなたは私のどこが気に入ったの？」（いわゆる対象語、具体的もしくは抽象的な部分を示す）、[3]「あなたはどこが痛いのか？」（主語、具体的な部分を示す）の3つの文について調査を行った。

次に、人間や物の場所化の必要性の有無について調べるため、[4]「私へ来い」、[5]「机へ来い」、[6]「犬へ行け」、[7]「兄へ行く」という表現が可能かどうかを調査した。なお以下の例文の訳は、日本語としては不自然であっても直訳に近いものとした。

3. 調査結果

3.1. トルコ語

トルコ語で場所を表す疑問代名詞 *nere*「どこ」(*ne*「何」)、指示代名詞 *bura*「ここ」(< *bu*「これ」)、*ora*「あそこ」(< *o*「あれ」)は、少なくとも共時的にはこれ以上分析できない³。先行研究に指摘されている通り、トルコ語では [T-1a], [T-2a], [T-3] のように場所が広く文法項として用いられることがわかる。なお [T-1b] はどこかの方言の言い回しのように感じられるという。

³ 3語とも、語末音節にアクセントを持つトルコ語では例外的に語頭音節にアクセントを持つ。さらに *sonra*「あとで」(< *son*「最後 (の)」などがある。このようにトルコ語では化石化した格的要素となっている (Göksel and Kerslake (2005: 65))。一方、他のチュルク諸語ではトルコ語の *yer*「場所」と同語源の語によって、「どこ」や「ここ」を分析的に表現している言語も多い (Gülensoy (2007) による)。したがってトルコ語でもこれらの語の後半部は「場所」を示す何らかの名詞的要素を語源としていることが考えられる (Gülensoy (2007: 184))は *bura* について、*bu ara* (*ara*「間」)を語源と考えている)。

- [T-1a] Bura-sı nere-si?
here-3SG.POSS where-3SG.POSS 「ここはどこ？」
- [T-1b] Bura nere-de?
here where-LOC 「ここはどこに？」
- [T-1c] Bura-sı nere-de?
here-3SG.POSS where-LOC 「ここはどこに？」
- [T-2a] Sen benim nere-m-i beğen-di-n?
you I.GEN where-1SG.POSS-ACC like-PST-2SG
「おまえは私のどこを気に入ったのか？」
- [T-2b] Sen benim ne-yim-i beğen-di-n?
you I.GEN what-1SG.POSS-ACC like-PST-2SG
「おまえは私の何を気に入ったのか？」
- [T-3] Sen-in nere-n ağr-ıyor?
you-GEN where-2SG.POSS pain-PRS 「おまえのどこが痛むのか？」

次に一般名詞の場所化についてみると、以下の [T-4], [T-5a], [T-6a], [T-7] の例にみるように、トルコ語では場所化を必要としないようだ。

- [T-4] Bana gel!
I.DAT come 「私へ来い！」
- [T-5a] Şu masa-ya gel!
that table-DAT come 「その机に来い！」
- [T-5b] Şu masa-nın yan-ın-a gel!
that table-GEN side-3SG.POSS-DAT come 「その机のそばに来い！」
- [T-5c] Şu masa-nın yer-in-e gel!
that table-GEN place-3SG.POSS-DAT come
「(テーブルを動かして) そのテーブルがあったところに来い！」
- [T-6a] Şu köpeğ-e git!
that dog-DAT go 「その犬へ行け！」
- [T-6b] Şu köpeğ-in yan-ın-a gel!
that dog-GEN side-3SG.POSS-DAT come 「その犬のそばへ来い！」
- [T-6c] Şu köpeğ-in yer-in-e gel!
that dog-GEN place-3SG.POSS-DAT come 「その犬の位置と入れ替われ！」
- [T-7] Ben kardeş-im-e gid-iyor-um.
I brother/sister-1SG.POSS-DAT go-PRS-1SG 「私は兄(の所)へ行く。」

なお [T-5c] や [T-6c] に見るように、yer「場所」を用いると、その相対的な位置の基準となっていた事物自体は別の場所に移動しなければならないようである。

3.2. モンゴル語

モンゴル語で場所を示す疑問代名詞は *xaana* 「どこ」 でこれ以上分析できない⁴。一方、場所を示す指示代名詞は *end* 「ここ」 (*ene* 「これ」)、*tend* 「あそこ」 (*ter* 「あれ」) で、与位格 *-d* のついたような形になっている。

モンゴル語では場所が文法項となった [M-1a], [M-1b], [M-3a], [M-3b] が許容される。[M-2a], [M-2b], [M-2c] が許容されない理由はよくわからない。なお [M-1b] より [M-1a] の方が、どこであるのか、より不明な感じがするという。

- [M-1a] *Ene xaana ve?*
this where Q 「これはどこ？」
- [M-1b] *Ene xaana-x' ve?*
this where-ADJLZ Q 「これはどこの (もの) ?」
- [M-2a] **Čamd minij xaana taal-a-gd-san be?*
you.DAT I.GEN where like-E-PASS-PTCP.PERF Q
「あなたに私のどこが気に入ったの？」
- [M-2b] **Čamd minij xaana-x' taal-a-gd-san be?*
you.DAT I.GEN where-ADJLZ like-E-PASS-PTCP.PERF Q
「あなたに私のどこが気に入ったの？」
- [M-2c] **Čamd xaana min' taal-a-gd-san be?*
you.DAT where 1SG.POSS like-E-PASS-PTCP.PERF Q
「あなたに私のどこが気に入ったの？」
- [M-2d] *Čamd minij juu taal-a-gd-san be?*
you.DAT I.GEN what like-E-PASS-PTCP.PERF Q
「あなたに私の何が気に入ったの？」
- [M-3a] *Xaana čin' övd-ö-ž baj-na?*
where 2SG.POSS pain-E-CVB.IMPF be-IND.PRS 「あなたはどこが痛いのか？」
- [M-3b] *Tany xaana (čin') övd-ö-ž baj-na?*
you.GEN where 2SG.POSS pain-E-CVB.IMPF be-IND.PRS
「あなたのどこが痛いのか？」

モンゴル語では [M-4a] のような「私へ来い」は許容されないが、「机」や「犬」や「兄」では「机へ／犬へ／兄へ 来い」のような言い方が可能であるという ([M-5a], [M-6a], [M-7a])。

- [M-4a] **Nad-ruu ir!*
I.DATLOC-DIR come 「私へ来い！」

⁴ ただし存在文の場合などでは *xaa* のみでも使えるので、*-na* が分析される可能性もある (山越氏の御教示による)。

- [M-4b] Nad-ruu xür-eed ir!
I.DATLOC-DIR arrive-CVB.PERF come 「私へ至るよう来い！」
- [M-4c] Nad deer xür-eed ir!
I.DATLOC top arrive-CVB.PERF come 「私の上へ来い！」
- [M-4d] End xür-eed ir!
this.DATLOC arrive-CVB.PERF come 「こっちへ来い！」
- [M-5a] { Širee-rüü / šireen deer } ir!
{ table-DIR / table top } come 「その机（の上）へ来い！」
- [M-5b] Ter širee-nij xažuu-d ir!
that table-GEN side-DATLOC come 「その机のそばに来い！」
- [M-5c] Širee-nij tend ir!
table-GEN that.DATLOC come 「机のそこに来い！」
- [M-5d] Širee-nij tijš-ee ir!
table-GEN over.there-REF.POSS come 「机のそのそっちへ来い！」

この [M-5d] の例は、話し手聞き手の両方がどこの何の机であるかを知らないと言えないという。

- [M-6a] Ter noxoj-ruu⁵ jav!
that dog-DIR go 「その犬へ行け！」
- [M-6b] Ter noxoj-ny xažuu-ruu jav!
that dog-GEN side-DIR go 「その犬のそばへ行け！」
- [M-6c] Ter noxoj-ny tijš-ee jav!
that dog-GEN over.there-REF.POSS go 「その犬のところへ行け！」
- [M-6d] Ter noxoj-ny tend jav!
that dog-GEN that.DAT go 「その犬のあそこに行け！」

この [M-6d] は「その犬について行け」のような意味となり、その犬は動いている感じがするという。

- [M-7a] Bi ax-ruu-g-aa jav-laa.
I elder.brother-DIR-E-REF.POSS go-PST⁶ 「私は兄へ行く」

⁵ deer 「上」を用いて言うことはできないという。ただし犬の像であればよい、という。人間であっても deer は使えないが、その人の授業などであればよい、という。したがって deer は何か静的な場所等を示す傾向を持っていることがわかる。さらに [M-4b] と [M-4c] では、deer を用いた [M-4c] の方が話し言葉的な感じがし、[M-4b] の方が書き言葉的な感じがするという。ただし [M-4b] を発話することもあり、[M-4c] を書くこともあるという。

⁶ モンゴル語の過去を示す形式の 1 つである -laa/-læ/-loo/-löö は、確実な近未来のできごとを示すのにも用いられる。ここでのグロスでは PST としておく。なおモンゴル語には着点をより強く意識した oči- 「行く、行きつく」という動詞があり、これを用いると先行する名詞の場所を示す格が現れないことがよくあ

[M-7b] *Bi axa-d-aa jav-laa.
I elder.brother-DATLOC-REF.POSS go-PST 「私は自分の兄に行く」

この [M-7b] における axad(aa) という与位格形は、ög- 「あげる」のような動詞との組み合わせでは使えるがこの文ではダメだという。やはり間接目的語の標示としての与位格の機能が、場所標示となることの妨げになっていることが考えられる。

[M-7c] Bi ax-yn tend jav-laa.
I elder.brother-GEN that.DATLOC go-PST 「私は兄のあそこに行く」

なおこの [M-7c] は、お兄さんの家の近くにある何かある場所などに行く、ということを意味し、お兄さんの家そのものに行くことを示さないという。

3.3. ナーナイ語

ナーナイ語には場所を示す分析的でない疑問代名詞、指示代名詞は存在しない。「どこ」は xai-do: what-DAT、「ここ」は əi-du: this-DAT で、いずれも与格を伴った形式である⁷。

[N-3b] にみるように、場所は副詞的に表現され、場所が名詞項になる場合には、[N-1b] の xai boa-ni: what place-3SG.POSS のように普通名詞を用いる必要がある。

[N-1a] *əi(=tənii) xai-do?
this=TOP what-DAT 「これはどこ？」

[N-1b] əi xai boa-ni?
this what place-3SG.POSS 「これは何の場所？」

[N-2a] *sii mii xai-do-ji-ja uləəsi-i-si?
you I what-DAT-1SG-OBL like-PTCP.IMPF-2SG
「おまえは私のどこに好きか？」

[N-2b] *sii mii xai-wa-ji-ja uləəsi-i-si?
you I what-ACC-1SG-OBL like-PTCP.IMPF-2SG 「おまえは私の何を好きか？」

[N-2c] xai-mi mimbiwə uləəsi-i-si?
do.what-CVB.IMPF I.ACC like-PTCP.IMPF-2SG 「なぜ私のことが好きなのか？」

[N-3a] sii xai-si ənusi-i-ni?
you what-2SG.POSS pain-PTCP.IMPF-3SG 「おまえの何が痛いのか？」

[N-3b] sii xai-do-a-si ənusi-i-ni?
you what-DAT-OBL-2SG pain-PTCP.IMPF-3SG 「おまえはどこに痛いのか？」

このようにナーナイ語において、場所はそのままでは文法項として現れないことがわか

るという。今後はさらに別の移動動詞でも研究を進めて行く必要がある。

⁷ ただし čado 「あそこに」の ča は「あれ」として用いることはできず（「あれ」は tai だが tai-du とはふつう言わない）、この場合は分析しにくくなっている。

る。

以下の [N-4], [N-5a], [N-6a], [N-7] の例に見るように、ナーナイ語では場所化の必要がなく、場所性のない名詞にも直接に格がついて場所を示すことができる。

- [N-4] minči ʃi-duu!
 I.DIR come-IMP 「オレへ来い！」
- [N-5a] tɔi dərə-či ɔnə-u!
 that table-DIR go-IMP 「その机へ行け！」
- [N-5b] tɔi dərə ʃakpa-či-a-ni ɔnə-u!
 that table beside-DIR-OBL-3SG.POSS go-IMP 「その机の近くへ行け！」
- [N-5c] tɔi dərə udə-či-ə-ni ɔnə-u!
 that table place-DIR-OBL-3SG.POSS go-IMP 「その机のところへ行け！」
- [N-6a] tɔi inda-či ɔnə-u!
 that dog-DIR go-IMP 「その犬へ行け！」
- [N-6b] tɔi inda ʃakpa-či-a-ni ɔnə-u!
 that dog beside-DIR-OBL-3SG.POSS go-IMP 「その犬の近くへ行け！」
- [N-6c] tɔi inda udə-či-ə-ni ɔnə-u!
 that dog place-DIR-OBL-3SG.POSS go-IMP 「その犬の場所へ行け！」
- [N-7] mii agaa-či-ji ɔnə-i-ji.
 I elder.brother-DIR-REF.POSS go-PTCP.IMP-1SG 「私の兄へ行く」

4. 第1部のまとめと結論

3節の調査結果を表にまとめると以下ようになる。

表2：調査結果の対照

	ナーナイ語	モンゴル語	トルコ語	日本語
場所の疑問詞・代名詞が分析不能	×	△	○	○
文法項としての場所の使用	×	△	○	○
場所化の必要性	×	△	×	○

日本語に観察される場所の名詞的／文法項的性格はトルコ語にも観察されたが、モンゴル語では若干認められたのみで、ナーナイ語には全く観察されなかった。したがってこの特徴はいわゆるアルタイ型言語において他の特徴と内的な関連性を持つ類型的な特徴とは考えにくい。

1.1. でみたように、日本語では「を」や「に」が場所項も文法項も示すことができ、「で」によっては道具も場所も示し得る。これに対し、通過点を示すのにトルコ語では奪格、モンゴル語では道具格が用いられ、ナーナイ語では処格が用いられる (Göksel and Kerslake (2005: 179)、山越 (2012: 68)、風間 (2010: 215))。トルコ語における処格は一時的な存在場所しか示さず、所有者を示さない (風間 (2003: 284))。ナーナイ語とトルコ語のいずれでも

具格が場所を示すことはない。このように今回取り上げたアルタイ諸言語では、日本語に比べ、場所を示す格と文法項を示す格が比較的是っきりと分かれている。したがって場所化が必要ないものと考えられる（これに対し中国語には格がなく、前置詞的に機能する語も目的語として場所をとるため、場所化の明示が必要になるものと考えられる）。したがって（一般名詞の）場所化は日本語において必須であるが、アルタイ型言語が共通してもつような類型的特点ではない。場所の文法項としての使用も、トルコ語では日本語同様、ある程度観察されるものの、モンゴル語では不十分で、ナーナイ語には全く観察されないことがわかった。

第2部

5. 先行研究の整理

ここでは、まず先行研究における場所語の記述（トルコ語：Göksel and Kerslake (2005)、モンゴル語：Kullman and Tserenpil (1996)、ナーナイ語：Avrorin (1961))、特にその品詞の認定と格支配について整理する。

トルコ語の文法書である Göksel and Kerslake (2005: 234) は、方向を示す副詞的語 (directional adverbial) として 6 つの語をあげている。これは下記の表 3 で ADVL として示した。一方で Göksel and Kerslake (2005: 250) では空間の関連を示す後置詞として 12 の形式を示している。これらは表 3 に PP として示した。Göksel and Kerslake (2005: 241-258) では、後置詞をそれが支配する格によって分類しているが、その格も表 3 に示した。表 3 には示さなかったが、さらに与格を支配する doğru 「～へ」（原意は「まっすぐ」）、kadar 「～まで」がある (Göksel and Kerslake (2005: 245))。

モンゴル語の文法書である Kullman and Tserenpil (1996: 228) は 12 の場所を示す副詞をあげている。これは表 3 に ADV として示した。Kullman and Tserenpil (1996: 285-296) では 57 の後置詞を扱っているが、表 3 にはそこから場所を示すと思われるものを筆者の判断で選んだ。Kullman and Tserenpil (1996: 285-296) も支配する格によって後置詞を分類しているが、これも表 3 に示した。副詞は PP、後置詞は ADV とし、両方に同形の語が挙がっている場合には PP/ADV とした。なお日本語の「GEN（離れた）上」の行に示した ööd は小沢 (1983:307) によれば「上に、より高く、より高くへ・に。（口語でしばしば接辞的に -aad, -eed, -ood, -ööd に変わる）；…に逆らって、反して；上に向かって；…の方へ、…へ」と記述されている。すなわち接辞化して母音調和し得ることがわかる。

ナーナイ語の文法書である Avrorin (1961: 197-206) は、場所を示す 21 の副詞に、不規則な語尾をとる名詞 goro 「遠く」を合わせた 22 の形式を表 5 の形でまとめている。このうち 11 の形式を他言語との比較・対照のため表 3 に示した。Avrorin (1961) は goro 以外の語を全部副詞にしているため、表 3 では goro 以外の全ての語に「副詞 (ADV)」の表示をつけることはしなかった。なおナーナイ語は主要部標示型の所有構造をとるため、所有構造の前項の名詞は常に無語尾となる。

表 3：場所語の品詞と支配する格

日本語	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語
GEN 前 (南 ⁸)	GEN ön PP ileri ADVL	GEN ömnö PP/ADV GEN urd PP/ADV ABL uragš PP	ǰulə-~ǰuli-
GEN 後ろ (北)	GEN arka PP geri ADVL	GEN ard PP/ADV GEN xojno PP/ADV	xama-~xami-
GEN 上	GEN üst PP	NOM deer PP/ADV NOM/GEN deeguur PP	oi-
GEN (離れた) 上	yukarı ADVL	GEN ööd PP	ui-
GEN 下	GEN alt PP aşağı ADVL	NOM door PP/ADV GEN uruu PP NOM/GEN dooguur PP	pəi-~pəgi-
GEN 内・中	GEN iç PP içeri ADVL	GEN dotor PP/ADV	doo-~dool-~dookia
GEN 真ん中・中間	---	GEN dund PP	---
GEN 外	GEN dış PP dışarı ADVL	GEN gadna PP/ADV ABL gadagš PP gadaa ADV	boa-~boal-~boakia-
GEN 横	GEN yan PP	---	---
GEN そば	---	GEN derged PP GEN xažuud PP GEN ojrolcoo PP	ǰakpa-
GEN こちら	---	GEN naana PP/ADV end ADV	əu-~əjəə-
GEN あちら ／向こう	---	GEN caana PP/ADV tend ADV	tao-~tajaa-
GEN 反対側	GEN karşı PP	---	---
GEN 間	GEN ara PP	GEN xoorond PP	---
GEN 周り	GEN etraf PP çerve PP	---	---
ABL 遠く (ABL 離れて)	GEN öte-CASE PP	ABL xol PP ABL gadna PP	goro N
GEN 近く	---	DATLOC ojr PP	---

詳しくは後述するが、表の上の方の、より基本的な意味を示す場所語に副詞として扱わ

⁸ モンゴル語では ömnö 「前」 は同時に 「南」 も示し、xojno 「後ろ」 は同時に 「北」 も示す。

れているものが多いことがわかる。モンゴル語の「上下」を意味する語が主格支配になっていることが注意をひく。「外」、「遠く」を意味する語は、おそらくその意味の特殊性から奪格をとるものと思われる。

次に、これらの場所語自体がどのような格やその他の形式をとり得るのかについて、先行研究の記述をみる。モンゴル語に関しては、内モンゴルのモンゴル語に関してではあるが、清格尔泰 (1991: 210-213) にその組み合わせを示した表がある。これにモンゴル語ハルハ方言の対応する形式 (/ の後ろに示した、ただしコンサルタント⁹が使用しないと答えた場合には --- とした) を加えて次に示す (一部省略した)。なお清格尔泰 (1991) は場所を示す語彙的要素を「時位詞」と呼び、名詞とも副詞とも後置詞とも異なる別の品詞としている。「時位詞」は語彙的な語 (「実詞」) と文法的な語 (「虚詞」) の性格を併せ持ち、さらに独自の変化を示すものである、としている。なお表 4 における斜字体の語は清格尔泰 (1991) の用語をそのまま使用したものである。

表 4：モンゴル語における場所語とその後続要素の組み合わせ

	名詞型時位詞		形容詞型時位詞		副詞型時位詞	
意義	時位	処位	部位	属位	方位	方向
日本語訳	～ (名詞的) ～の	～の方 (へ)	～の ～にある	～にある	～を通して	～の方へ
語尾 意味	n-a, n-e r-a, r-e da	tai, tei	tu, tü, du, dü	ki daki, deki	yur gür	ši
前／南	emün-e/ ömnö	emünetei/ ömnötee	emünetü/ ömnöd	emüneki/ ömnöx	emünegür/ ömnüür	emüneši/ ömnöš
後ろ／北	qoin-a/ xojno	qoitai/ xojtee	qoitu/ xojd	qoinaki/ xojnox~ xojdox	qoiyur/ xojguur	qoiši/ xojš
東	jegün/ züün	jegüntei/ züüntee	(jegün)	jegündeki/ züündex	jegüber/ züüneer	jegünši/ züünš
西	barayun baruun	barayuntai/ baruuntaa	(barayun)	barayundaki/ baruundax	barayunbar/ baruunaar	barayunši/ baruunš
上	deger-e/ deger-e	degetei/ deetee	degedü/ deed	degereki/ deerx	degegür/ deegüür	degegši/ dees
下	door-a/ door	doyotai/ ---	dooradu/ dood	dooraki/ doorx	doyuur/ dooguur	doroysi/ dooš
中	dumda/ dund	(dumda)/ dund	dumdadu/ dund	dumdaki/ dundax	dumdayur/ dunduur	dumda teši/ dund tijš

⁹ コンサルタントの情報については、5.1. で後述する。

外	yadan-a/ gadna, yaday-a/ gadaa	yadatai/ ---	yadayadu/ gadaad	yadanaki/ gadnax	yadayur/ gaduur	yadayši/ gadagš
内	dotor-a/ dotor	dototai/ ---	dotoyadu/ dotood	dotoraki/ dotorx	dotoyur/ dotuur	dotoyši/ dotogš
ここ	nayan-a/ naana	nayatai/ naanatee	inadu/ naad	inaduki, (nayanaki)/ index, naanax	nayayur/ naaguur	naši, inayši/ naaš, janagš
あそこ	čayan-a/ caana	čayatai/ caanatee	čanadu/ caad	čanaduki, (čayanaki)/ caadax, caanax	čayayur/ caaguur	čaši, činayši/ caaš, čanagš
前	urida/ urd	uritai/ ---	uridu/ urd	uridaki/ urdax	uridayur/ urduur	uruyši/ uragš
後ろ	aru-du/ ard	aruntai/ ---	(aru)/ ar	arundaki/ ardax	(aru-bar)/ araar, (arduur)	arunš/ aragš

詳しくは後述するが、化石化して生産性の低い格的な諸形式が多く、多くの語に観察されることがわかる（「属位」の -ki, -daki, -deki を除く、なおこの接辞に関しては風間 (2018) も参照されたい）。

コンサルタントによれば、naaš~janagš「こっちへ」、caaš~čanagš「あっちへ」の違いは、naaš, caaš が口語形で、janagš, čanagš が文語形である、という違いであるという。urd「前」と ard「後ろ」はどちらも与位格 -d がついたような形をしているが、清格尔泰 (1991) では ard の方のみ分析されている。Kullmann and Tserenpil (1996) が後置詞と副詞のいずれにおいてもその形式を ard として扱っているのに対し、小沢 (1983: 25) には ar「後ろ、背 etc.」のみ立項されていて、ard は立項されていない。

次にナーナイ語に関しては、やはり Avrorin (1961: 203) が場所を示す語彙的要素とその後続要素の組み合わせを表にして示しているので、これを引用する。

表 5：ナーナイ語における場所語とその後続要素の組み合わせ

	語幹的部分	方向 「～へ」	位置 「～に、～で」	起点 「～から」	通過点 「～を」
前	julə~juli-	juləsi	julilə	juliəji	julipə
後ろ	xama~xami-	xamasi	xamila	xamiaji	xamipa
(離れた) 上	ui-	uisi	uilə	ujəji	uipə

下	pəi-~pəgi-	pəisi	pəgilə	pəgiəji	pəgipə
山の方	dui-	duisi	duilə	dujəəji	duipə
川の方	wai-	waisi	waila	wajaaji	waipa
岸から離れた 川の中の方	talga-~talgi-	talgisi	talgala	talgiaji	talgalpa
対岸	bai-~bagi-	baisi	bagila	bagiaji	bagipa
逆方向	xanggi-	xangisi	xangila	xangiaji	xangipa
(表面の) 上	oi-	oisi	oila	ojaaji	oipa
外	boa-~boal-~ boakia-	---	boala	boakiaji	boalpa
中	doo	---	doola~dookiala	dookiaji	doolpa~ dookiapa
上流	solo-~soli-	solopči~soli	solila	soliaji	solipa
下流	xəjə-~xəi-~ xəji-	xəjəpči~xəi	xəjilə	xəjiəji	xəjipə
そば	jakpa-	jakpasi	---	---	---
背中側	čia-	čiasi	---	---	---
こっち	əu-~əjəə-	əusi	əjəələ	əjəəji~əwəŋki(ji)	---
あっち	tao-~taja	taosi	tajaala	tajaaji~tawəŋki(ji)	---
どっち	xao-~xajaa-	xaosi	---	xajaaaji~xawəŋki(ji)	---
右	an-	aanči	---	---	---
左	jəun-	jəunči	---	---	---
遠く	goro-	---	---	goronkiji	---

以下では次の3つの点に関して、上記の先行研究の記述を検討する。すなわち、

- [1] 場所語の諸形式自体とその品詞について、
- [2] その場所語を修飾する名詞が属格を伴うか否か、
- [3] その場所語自体がとる格、

の3点である。[1] に関して副詞的な語が別個に存在せず副詞的な機能もなく、[2] に関して支配する名詞が常に属格をとり、[3] に関して場所語が他の一般名詞と同じような格を規則的にとるならば、その言語における問題の場所語は、日本語同様、全く名詞的であるということになる。他方[1][2][3] がいくぶんでもその反対の状況を示せば、その言語の問題の場所語はより副詞的／後置詞的であるということになる。

まず [1] に関して、トルコ語とモンゴル語では「前へ、後ろへ、上へ、下へ、中へ、外へ」という基本的で（おそらく）使用される頻度も高い場所語には、前に名詞をとらない副詞（的語）の形式が存在する。トルコ語では同じ意味の後置詞とは異なる形式を示すが、モンゴル語では後置詞と同形である。トルコ語の一連の副詞的語（ileri「前へ」、geri「後ろへ」、yukarı「上へ」、aşağı「下へ」、içeri「中へ」、dışarı「外へ」）は古代チュルク語におけ

る方向格 -GArU (Erdal (1998: 142)) の付いた形に由来するものと考えられる。

ナーナイ語の場所語の形式自体に関しては後述する。

次に [2] の場所語が支配する格に関してみると、まずモンゴル語の deer「上」と door「下」の 2 語が、無語尾の名詞を支配するという点で特異である。この点でこれらは後置詞に近い性格を示している。トルコ語の後置詞はもっぱら属格名詞を支配するが、比喩的な表現や一般論である場合、もしくは支配される名詞が不定かつ不特定である場合には、無語尾の名詞を支配することがあるという (Göksel and Kerslake (2005: 251-252))。これはトルコ語で [N N-所属人称] のような主要部標示型の所有構造が複合名詞的に機能することと関連しているものと思われる。日本語にも属格が間に現れない「駅前」や「ガード下」などの表現が複合語として存在することを想起させる。

最後に [3] の場所語の諸形式自体がとる格についてみる。まずトルコ語では上記の副詞的語は単独で副詞的に機能する一方で、処格や奪格をとり、さらに何もつかない形式と同じ意味で与格をとることもできるという (Göksel and Kerslake (2005: 234))。これは上記の方向格が化石化してしまった結果、他の場所語や一般名詞からの類推によって格がつくようになってきたものと考えられる。さらに öte「～から離れた場所」は処格／与格／奪格のいずれかをつけないければ用いることができないという。

モンゴル語では、一般に通過点を示す道具格 (-AAr¹⁰) とは異なる形式 -UUr (文語表記では -yur / -gür)、および一般に方向を示す -rUU/-IUU とは異なる形式 -š (文語表記では -ši) が用いられる。山越 (2012: 176) によれば、モンゴル語における一連の場所語 (山越 (2012) は全て副詞としている) は格を伴わないが、奪格¹¹だけは接続することがあるとしている。

ナーナイ語に関して、Avrorin (1961) はこれらの語における不変化の語幹的部分をもはや生命のない (露 mertvyj) 語幹であるとし、全ての語を副詞であるとしている。しかし、起点を示す一連の語形が持つ -ji~jiAji は一般の名詞の奪格の形式と同じ形である。他方、一般の名詞が静止した場所を示す際に与格 -dO をとるのに対して、場所語は処格 -IA をとっている。同じく、一般の名詞が通過点を示す際に処格 -IA もしくは対格¹² -bA/-wA をとるのに対して、場所語は -pA のような形をとっている。ナーナイ語の動詞につく接辞のうち b にはじまるものには、(理由は不明だが) o-「なる」などの不規則動詞に限って p にはじまる異形態を示すものがある (非人称形動詞 -pOri vs. -(b)Ori, 使役 -pOwAAAn vs. -(bO)wAAAn) ので、この -pA も場所語に限って現れる異形態とみることもできる。ただし不規則であることに変わりはない。ただこの -pA を持つ一連の形式は、少なくとも現在はもはや使われないものが多いようだ。コンサルタント (後述) によれば、uipə, xəjipə は使えるが, julipə, xamipa, duipə, waipa, solipa は聞いたことがないという。さらに一般の名詞が方向を示す際には方向格 -či をとるのに対して、場所語は -si のような形をとっている。この要素はエウエンキー語で -skii という形で現れるので (方向格は -tkii etc.)、やはり方向格の不規則な形とみることもできる。しかしこれもやはり不規則であることには変わらない。

¹⁰ 形式中の大文字表記は母音調和による異形態があることを示す。以下でも同様。

¹¹ 山越 (2012: 176) は起点格という用語で呼んでいる。

¹² Avrorin (1961: 178) 参照。他の格の用法に関しては風間 (2010) も参照されたい。

さらに Onenko (1980) を調べてみると、ナーナイ語の場所語の語幹部分が主格で名詞的に用いられている例が見出される。したがって Avrorin (1961) が化石化しているとみているのは正しくない。

- (3) naonjokaan ĵuliə-ni budubudu simukpi-ni.
 boy front-3SG.POSS all.over be.oiled-3SG
 「少年の前は一面油だらけだ」

- (4) sii xamia-si toxalaa=mañaa.
 you back-2SG.POSS dirt=only
 「おまえの背中（後ろ）は泥だらけだ」

- (5) tora pəgiə-ni=rəgdə ñaa-xa-ni,
 pole root-3SG.POSS=only rot-PTCP.PERF-3SG
 uĵə-ni mənə bi-čin-ĵi-ĵi=tul bi-i-ni.
 upper.part-3SG.POSS oneself be-PTCP.PERF-INS-REF.SG.POSS=EMP be-PTCP. IMPF-3SG
 「柱は下だけが腐っていた、上の部分はそれ自体が（そうで）あったように（そのままで）ある」

- (6) ĵoo doo-ni pakčii pakčii bi-i.
 house inside-3SG.POSS dark dark be-PTCP. IMPF
 「家の中は真っ暗だ」

なお、ナーナイの生業が主に漁撈であり、もっぱら川に沿って暮らしていることから、その空間把握も川を基準に行われる。したがって場所語には「前、後ろ、上、下、中、外」のような語ばかりでなく、「山の方、川の方、上流、下流、岸から離れた方、対岸」などが現れている。

以上、本稿の対象言語の場所語の性格について、先行研究からの情報を基に検討を加えた。言語によってその度合いに差はあるものの、日本語の場所語が全く名詞的な性格を示すのに対し、アルタイ諸言語の場所語はある程度副詞的／後置詞的性格を示すことがわかる。しかし文献からの情報では、特に [3] の場所語がとる格について十分な情報を得ることができない。使用される具体的な文脈もわからない。したがって本稿では統一した例文による聞き出し（elicitation）でデータを収集することによって、場所語のふるまいを分析する。

6. 聞き出しによる調査

6.1. 調査方法

やはりコンサルタントより聞き出し（elicitation）による調査を行った。コンサルタントの情報は以下の通りである。

表 6：コンサルタントの情報

言語	生年	出身地
トルコ語	1981	イスタンブール
モンゴル語	1987 1989	ウランバートル オヴルハンガイ (Övürxangaj)
ナーナイ語	1937	ハバロフスク州ナイヒン (Najkhin) 村

モンゴル語のコンサルタントは2名であるが、基本的にその判断に違いはなかった。

調査は次のような文の聞き出しによって行った。すなわち、「前」「後ろ」「(離れた) 上」「(接した) 上」「下」「中」「外」「間」「横」の9個の場所語が、《1》基準となる位置を持たず副詞的に用いられる場合、《2》静止した場所として用いられる場合、《3》方向として用いられる場合、《4》通過点として用いられる場合、《5》起点として用いられる場合、の例文を作成し、それらを媒介言語を通じてコンサルタントに作文していただいたり、こちらで作文したものをコンサルタントに修正していただいたりして、場所表現を得た。ただし「接した(上)」「下」「中」「外」「間」「周り」「横」に関しては基準となる場所の存在しない副詞的な表現は想起しづらいと考えたため、調査しなかった。

6.2. 調査結果

以下場所語ごとにその結果を表に整理して示す（なお、得られた全例文は調査例文と共に稿末の【付録】に付した）。なお表中の G は属格名詞、Ø は無語尾の名詞が先行することをそれぞれ示している。ここでも（5 節で）先行研究に関して検討した [1][2][3] の観点からの分析を行ってその結果を示す。すなわち、[1] に関して、副詞／後置詞的な語を用いる場合と、[3] に関して、後ろに格がつかない場合には表の枠を太線にして示した。[2] に関して、属格をとらず無語尾の名詞が前置される場合にはその無語尾名詞を囲み線を付して $\boxed{\text{Ø}}$ と表示した。[3] に関して、一般の名詞がとる格形式とは異なる格形式をとる場合には、その異なった形を示す「格」にやはり囲み線を付して示した。

表 7：「前」の場所語による表現

	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語
前へ V	ileri	(uragšil-)	ǰuləsi
～の前に V	G ön-ü-n-de	G urd	ǰulǰ-lǰ-ni
～の前へ V	G ön-ü-n-e	G urd	ǰulǰ-či-ǰ-ni
～の前を V	G ileri-si-n-de	G urd / ömnö	ǰulǰ-lǰ-ni
～の前から V	G ön-ü-n-den	G urd-aas	ǰulǰ-ǰi-ǰ-ni

モンゴル語において、「犬が前に行った」は Noxoj uragšilsan. 「犬は前進した」のように表現するのが適当であるとされた。これに対し Noxoj uragšaa javsan. は「犬は南の方へ行った」の意味になるという。

表 8 : 「後ろ」の場所語による表現

	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語
後ろへ V	geri	aragš-aa / (uxr- V)	xamasi
～の前に V	G ard-i-n-da	G ard	xamia-la-ni
～の後ろへ V	G ard-i-n-a	G ard	xamia-či-a-ni
～の後ろを V	G geri-si-n-de	G ard	xamia-la-ni
～の後ろから V	G ard-i-n-dan	G ard-aas	xamia-ji-a-ni

モンゴル語の -(g)š による派生形は、再帰の接辞 -AA をとることがわかる。なお Noxoj aragšaa javsan. は、振り返ってから逆方向に進んだ場合の表現であり、後ろに後ずさった場合には Noxoj uxarc yavsan. という表現になるという。モンゴル語の ard は上述したように ar-d と分析することも考えられ、コンサルタントの中にはそのように意識しているとの内省を持つ者もある。しかし、「～の後ろから」では ar-aas とならず、ard-aas という形であらわれているので、ここでは分析していない。このような形態やその出現状況もこの場所語の過渡的な状況を物語っているとみることができよう。

表 9 : 「(接した) 上」の場所語による表現

	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語
～の上に V	G üst-ü-n-de	Ø deer	ojaa-la-ni
～の上へ V	G üst-ü-n-e	Ø deer	ojaa-či-a-ni
～の上を V	G üst-ü-n-de	Ø dee(güü)r	ojaa-wa-ni
～の上から V	G üst-ü-n-den	Ø deer-ess	ojaa(-jia)-ji-a-ni

モンゴル語において、「～の上を V」対応表現では deegüür も deer も用いられるが、deegüür の方がより広がりのある場所に感じられるという。

表 10 : 「(離れた) 上」の場所語による表現

	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語
上へ V	yukarı-ya	dees-ee	uusi
～の上に V	G üst-ü-n-de	G deer	ujəə-la-ni
～の上へ V	G üst-ü-n-e	Ø/G deegüür	ujəə-či-a-ni
～の上を V	G üst-ü-n-de	Ø/G dee(güü)r	uipə
～の上から V	G üst-ü-n-den	Ø deer-ees	ujəə(-jia)-ji-a-ni

トルコ語の「上へ V」の対応表現では、副詞的語である yukarı が用いられているため、表の枠を太線としたが、同時に与格 -(y)A も用いられている点に注意する必要がある。

表 11 : 「下」の場所語による表現

	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語
～の下に V	G alt-ı-n-da	Ø door	pəgiə-lə-ni
～の下へ V	G alt-ı-n-a	Ø dooguur	pəgiə-či-ə-ni
～の下を V	G alt-ı-n-da	Ø door	pəgiə-wə-ni
～の下から V	G alt-ı-n-dan	Ø door-oos	pəgiə(-jia)-ji-ə-ni

表 12 : 「中」の場所語による表現

	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語
～の中に V	G iç-i-n-de	Ø dotor	doo-lə-ni
～の中へ V	G iç-i-n-e	Ø dotor	doo-či-a-ni
～の中を V	G iç-i-n-de	Ø tojron	doo-wa-ni
～の中から V	G iç-i-n-den	Ø dotr-oos	doo(-jia)-ji-a-ni

モンゴル語の dotor 「中」は、先行研究の Kullmann and Tserenpil (1996) では属格を支配する後置詞とされていたが、もっぱら無語尾の主格がその前に観察される。コンサルタントによると、Kullmann and Tserenpil (1996: 289) の下記の例文でも属格でなく、無語尾の主格名詞にしたほうがよいという。

- (7) Ter öröö-nij dotor xülee-sen.
 (s)he room-GEN inside wait-PTCP.PERF
 「彼（女）は部屋の中で待った」

表 13 : 「外」の場所語による表現

	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語
～の外に V	G dış-ı-n-da	G gadaa	boakia-lə-ni
～の外へ V	G dış-ı-n-a	G gadna	boakia-či-a-ni
～の外を V	G dış-ı-n-da	G gadaa	boakia-wa-ni
～の外から V	G dış-ı-n-dan	G gadn-aas	boakia(-jia)-ji-a-ni

表 14 : 「間」の場所語による表現

	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語
～の間に V	G ara-sı-n-da	G gol-d n'	aldan-do-a-ni
～の間へ V	G ara-sı-n-a	G goloor	aldan-či-a-ni
～の間を V	G ara-sı-n-da	G gol-d	aldam-ba-ni
～の間から V	G ara-sı-n-dan	G gool-oos	aldan(-jia)-ji-a-ni

モンゴル語の *gol* は一般名詞のようだが、「～の間へ V」では与格や方向格をとらず、清格尔泰 (1991) のいう副詞型時位詞方位の派生接辞 *-UUr* による特別な形を示している。奪格をとる場合にも、少なくとも表記上長母音になっている。

表 15 : 「横」の場所語による表現

	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語
～の横に V	G <i>yan-i-n-da</i>	G <i>xažuu-d</i>	<i>ǰakpa-do-a-ni</i>
～の横へ V	G <i>yan-i-n-a</i>	G <i>xažuu tal-ruu</i>	<i>ǰakpa-či-a-ni</i>
～の横を V	G <i>yan-i-n-da</i>	G <i>xažuu-d</i> (<i>ergeld- V</i>)	<i>ǰakpa-wa-ni</i>
～の横から V	G <i>yan-i-n-dan</i>	G <i>xažuu tal-aas</i>	<i>ǰakpa(-ǰia)-ǰi-a-ni</i>

ここまでの場所語と違い、「横」ではどの言語にも副詞／後置詞的な要素が観察されない。他方で、逆に場所としての性格が弱いのか、「～の横へ V」と「～の横から V」に対応するモンゴル語の表現では、*tal*「側」が加えられて場所的な性格を強めていることが観察される。

7. 第 2 部の分析と考察

ここではやはり先の [1][2][3] の観点から総合的な分析を示し、考察を加えることにする。まず [1] の場所語自体の形式についてみると、いわゆるアルタイ諸言語に属するどの言語でも主体自体を基準とした主体の移動の方向を示す際に、副詞的な場所語が用いられることがわかる。モンゴル語ではその基準となる主体は再帰接辞によって明示される。

[2] の場所語が属格をとるか否かについてみると、モンゴル語の *deer*「上」と *door*「下」、さらに *dotor*「中」が無語尾の主格名詞を支配するという点において、際立って後置詞的な性格を示す。

[3] の場所語自体がとる格についてみると、やはりまず格をとらないという点でモンゴル語の場所語の多くが際立って後置詞的な性格を示す。しかし奪格に関してのみは、トルコ語、ナーナイ語と同様に、モンゴル語もこの格をとる。このことは奪格の示す意味がより有標¹³で、その頻度も低いために一般名詞からの類推を受けやすいということから説明できよう。モンゴル語では、格をとらないために方向なのか静止した場所なのか通過点なのか、という違いを場所語の方から判断することは難しくなる。これを補うためか、*uragšil-*「前進する」、*uxr-*「後ずさりする」、*ergeld-*「一つ場所でぐるぐる回る」などの動詞が使用されている点が注意をひく。

トルコ語では化石化した方向格を持つ副詞的語も与格をとるようになってきている。すなわち場所語は名詞的な性格を強める方向に変化しつつある。ナーナイ語でも、*-pA* を持ち通過点を示す不規則な形式が使われなくなってきているなど、場所語の名詞的な性格は強まって来ているように思われる。これに対し、モンゴル語では、方向格とも言われる *ruu*

¹³ 移動動詞がとる一般的な名詞項としては予想できないものであるという点で、有標であると考えられる。

が副詞 *uruu* 「下方へ、下流へ」の文法化しつつある要素であるのみならず、*deer* 「上」や *suu-*「座る」などの一般的な語が格に準ずる形式へと変化する傾向のあることが注目される。

(8) *Üjlčlegč biden deer ire-v.*

serviceman we.GEN on come-IND.PST

「サービスマンは私たちの所に来た」(Kullmann and Tserenpil (1996: 186))

コンサルタントによれば、次の例の *nomyn sand suu-ž* は決まり文句となっており、*-d suu-ž* は複合格助辞¹⁴と呼ばれるようなものとなっている。

(9) *Či öčigdör nom-yn san-d suu-ž*

you yesterday book-GEN shed-DAT sit-CVB.IMPF

nom unš-maar ge-sen, unš-san uu?

book read-PTCP.OPT say-PTCP.PERF read-PTCP.PERF Q

「おまえは昨日図書館で本を読みたいと言っていたが、読んだのか。」

(Kullmann and Tserenpil (1996: 152))

対照言語学的な観点からみると、モンゴル語の場所語の副詞的／後置詞的な性格がもっとも強いのに対し、日本語の場所語は徹頭徹尾名詞的であると言えるだろう。トルコ語とナーナイ語はその中間的な位置を占めている。ただこのような言語間における共時的な性格の違いと上記のような通時的変化の傾向の違いが何に起因するのかについては、まだ解明できていない。

さらに大きな視野から考えると、英語などをはじめとするいわゆる SAE (Standard Average European) の言語で場所がもっぱら副詞的に扱われるのに比べると、モンゴル語の場所語もやはりかなりの名詞(項)的な性格を示している。再帰接辞や奪格をとり、多くの場合に支配する名詞に属格を要求するためである。したがって、本稿で扱ったようなアルタイ型の言語において文法項と副詞項は連続しているものの、基本的に場所語は名詞的な性格を強く示しているものとする。アルタイ諸言語の文法記述には、本稿でいう場所語をもっぱら「後置詞」とするもの(例えばトルコ語では Göksel and Kerslake (2005)、モンゴル語では Kullman and Tserenpil (1996))と、もっぱら「副詞」とするもの(例えば山越 (2012))が多く存在しているが、筆者は形容詞や数詞と共に実詞¹⁵の下位類とする方がこれらの言語の文法体系の実情に即していると考ええる。

最後に今後の課題をあげておく。まず今回は「前」「後ろ」「(離れた)上」「(接した)上」「下」「中」「外」「間」「横」の9個の場所語しか扱えなかった(他に「こちら」「あちら」「こっち」「あっち」「反対側」「周り」「東」「西」「左」「右」「遠く」「近く」[川を基準にした方向]などが、言語にもよるが多かれ少なかれ場所語的な性格を示している)。さらに、場所語の多くは時間を示すのに用いられるため、時間を示す用法についても今後研究する

¹⁴ 日本語での「～において」、「～について」などのようなものを指す。日本語学会(編)(2018: 790)を参照。

¹⁵ ここではこの「実詞」という語を、名詞や形容詞、数詞、場所名詞などの上位語を指す用語として用いている。

必要がある。コンサルタントの年齢層や方言によっても違いがあるようであり、その点についても今後さらに精査していく必要がある。

〔謝辞〕

本稿の第1部については、CSEL（ユーラシア言語研究コンソーシアム）年次総会で発表し、その際に参加されていた先生方から有益な情報を賜った。全員のお名前をあげることはできないが、ここに記して感謝申し上げたい。貴重なコメントを下さった2名の匿名の査読者の先生方にもお礼申し上げたい。

何より時間を割いて例文の適格性を判断するとともに貴重なコメントをくださったコンサルタントの方々に深くお礼申し上げたい。

略号一覧

1, 2, 3: 1st person, 2nd person, 3rd person, ACC: accusative, ADJLZ: adjectivalyzer, CVB: converb, DAT: dative, DATLOC: dative-locative, DIR: directive, E: epenthetic vowel/consonant, EMP: emphasis, GEN: genitive, IMP: imperative, IMPF: imperfective, IND: indicative, INS: instrumental, J: Japanese, LOC: locative, M: Mongolian, N: Nanai, NOM: nominative, OBL: oblique marker, OPT: optative, PASS: passive, PERF: perfective, POSS: possessive, PRS: present, PST: past, PTCP: participle, REF: reflexive, T: Turkic, Q: question marker, SG: singular, TOP: topic, -: 接辞境界, =: 接語境界

参考文献

- Avrorin, V. A. (1961) *Grammatika nanajskogo jazyka II*. Leningrad: Izd. AN SSSR.
- Erdal, M. (1998) 7 Old Turkic. L. Johanson and É. Á. Csátó (eds.) *The Turkic languages*, 138-157. New York: Routledge.
- Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish. A comprehensive grammar*. Routledge, London.
- Gülensoy, T. (2007) *Türkiye türkçesindeki türkçe sözcüklerin köken bilgisi sözlüğü: etimolojik sözlük denemesi I (A-N)* [トルコのトルコ語におけるチュルク諸語語源情報辞典：語源辞書試論] Ankara: SanalBaba.
- Haspelmath, M., M. S. Dryer, D. Gil, and B. Comrie (eds.) (2005) *The world atlas of language structures*. Oxford: Oxford University Press.
- 林徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』東京：白水社
- Iggesen, O. A. (2005) Number of cases. In Haspelmath et al. (eds). map 49 in *WALS*, 202-205.
- 風間伸次郎 (2003) 「アルタイ諸言語の3グループ（チュルク、モンゴル、ツングース）及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか 一対照文法の試み」『日本語系統論の現在』日文研叢書 31, アレキサンダー・ボビン／長田俊樹 共編, 国際日本文化研究センター 249-340.
- 風間伸次郎 (2010) 『ナーナイの民話と伝説 12 付：ナーナイ語文法概説』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 風間伸次郎 (2018) 「トルコ語の *ki(n)* とモンゴル語の *-x* との比較・対照 ー共時的・通時的両面からの検討ー」『ユーラシア諸言語の多様性と動態 ー20 号記念号』CSEL Series

20: 191-225.

風間伸次郎 (forthcoming) 「語順と情報構造の類型論」『日本語の格標示と分裂自動詞性』東京：くろしお出版

Kullmann, R. and D. Tserenpil (1996) *Mongolian grammar*. Hong Kong: Jenso. ltd.

日本語学会 (編) (2018) 『日本語学大辞典』東京：東京堂出版

Nose, M. (2006) Diversity of cases: By using the world atlas of language structures (WALS). 『言語研究』 130: 109-123.

Onenko, S. N. (1980) *Nanajsko-Russkij slovar'*. Moskva. Izd. Russkij jazyk.

小沢重男 (1983) 『現代モンゴル語辞典』東京：大学書林

清格尔泰 (1991) 『蒙古語語法』呼和浩特：内蒙古人民出版社

田窪行則 (1984) 「現代日本語の場所を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12: 89-117.

寺村秀夫 (1968) 「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12. (『寺村秀夫論文集 I』1993 くろしお出版に所収 3-20.)

藤堂明保・相原茂 (1985) 『新訂 中国語概論』東京：大修館書店

梅谷博之 (2008) 『モンゴル語の使役接辞 -UUL と受身接辞 -GD の意味と構文』博士論文. 東京大学

山口幸二 (1980) 「モンゴル語の「格」の表現」『日本語・日本文化』9: 19-32.

山越康裕 (2012) 『詳しくわかるモンゴル語文法』東京：白水社.

【付録】(J || T || M || N)

犬が前へ行った。|| Köpek **ileri** gidiyor. || Noxoj **uragšilsan**. || inda **juləsi** ənəini.

犬は彼の前にいる。|| Köpek on-un **ön-ü-n-de**.|| Noxoj tüü-**nij urd** bajgaa. || inda tõi nai **julĩa-lə-ni** biini.

犬は彼の前へ行くところだ。|| Köpek on-un **ön-ü-n-e** gidiyor. || Noxoj tüü-**nij urd** očsan. || inda tõi nai **julĩa-či-ə-ni** ənəxəni.

犬は彼の前を行っている。|| Köpek on-un **ileri-si-n-de** gidiyor. || Noxoj tüü-**nij urd/ömnö** javaa. || inda tõi nai **julĩa-lə-ni** ənəini.

犬は彼の前から (こっちへ) 来た。|| Köpek on-un **ön-ü-n-den** buraya geldi. || Noxoj tüü-**nij urd-aas** irsen. || inda tõi nai **julĩa-ji-ə-ni** əusi jičini.

犬が後ろへ行った。|| Köpek **geri** gidiyor. || Noxoj **aragšaa** javsan. / Noxoj **uxarc** yavsan. || inda **xamasi** ənəini.

犬は彼の後ろにいる。|| Köpek on-un **ard-ı-n-da**. || Noxoj tüü-**nij ar-d** bajgaa. || inda tõi nai **xamia-la-ni** biini.

犬は彼の後ろへ行くところだ。|| Köpek on-un **ard-ı-n-a** gidiyor. || Noxoj tüü-**nij ar-d** javsan. || inda tõi nai **xamia-či-a-ni** ənəxəni.

犬は彼の後ろを行っている。|| Köpek on-un **geri-si-n-de** gidiyor. || Noxoj tüü-**nij ar-d** javaa. || inda tõi nai **xamia-la-ni** ənəini.

犬は彼の後ろから (こっちへ) 来た。|| Köpek on-un **ard-ı-n-dan** buraya geldi. || Noxoj tüü-**nij ard-aas** irsen.

〔彼がこちらに向かって来ていて、その後ろから犬もついてきている場合に言う〕 || *inda t̪ai nai xamia-ji-a-ni əusi j̪ičini*.

ネコが机の上にいる。 || *Kedi masa-nın üst-ü-n-de*. || Muur šireen **deer** bajna/bajgaa. || *kəksə dəɾə ojaa-la-ni biini*.

ネコが机の上へ跳び上がった。 || *Kedi masa-nın üst-ü-n-e sıçradı*. || Muur šireen **deer** üserč garsan. || *kəksə dəɾə ojaa-či-a-ni puikuxəni*.

ネコが机の上を歩いている。 || *Kedi masa-nın üst-ü-n-de dolaşıyor*. || Muur šireen **deer/deegüür** alxaž bajna. || *kəksə dəɾə ojaa-wa-ni pulsiini*.

ネコが机の上から跳び下りた。 || *Kedi masa-nın üst-ü-n-den atladı*. || Muur šireen **deer-ees** üserč buusan. || *kəksə dəɾə ojaa-jia(-ji-a)-ni puikuguxəni*.／

鳥が上へ飛びあがった。 || *Kuş yukarı-ya uçtu*. || Šuvuu **deešee** xöörön nisež bajna. [xöörö-n は xöör- 「飛び立つ、空中にあがる」の非分離副動詞形] || *gasa uisi dəgdəguxəni*.

電灯が机の上にある。 || *Işık masa-nın üst-ü-n-de*. || Gerel šireen-**ij deer** bajna. [机から離れてその上に存在する場合に用いる。属格をとって *šireen* としてしまうと、机の上に置いてある感じになる] || *ixərə dəɾə ujəə-lə-ni biini*.

鳥が学校の上へ飛んで行った。 || *Kuş okul-un üst-ü-n-e uçtu*. || Šuvuu *surguul’/surguul-ijn deegüür* nissen. || *gasa škola ujəə-či-ə-ni dəgdəini*.

鳥は学校の上を飛んでいる。 || *Kuş okul-un üst-ü-n-de uçuyor*. || Šuvuu *surguul’/surguul-ijn deer* nisež bajna. [狭い場所を飛んでいる場合] / Šuvuu *surguul’/surguul-ijn deegüür* nisež bajna. [漠然とした広い場所を飛んでいる場合] || *gasa uipə dəgdəəčiini*.

鳥が学校の上から飛んできた。 || *Kuş okul-un üst-ü-n-den uçtu*. || Šuvuu *surguul-ijn deever deer-ees* nisež irsen. [surguul’ と学校の属格をとってしまうと、単に学校という場所を指すだけになり、「上」という意味がなくなる。deever は「屋根」] || *gasa škola ujəə(-jia)-ji-ə-ni dəgdəguini*.

ネコは机の下にいる。 || *Kedi masa-nın alt-ı-n-da*. || Muur šireen **door** bajna. || *kəksə dəɾə pəgiə-lə-ni biini*.

ネコは机の下へ入った。 || *Kedi masa-nın alt-ı-n-a girdi*. || Muur šireen **dooguur** orson. || *kəksə dəɾə pəgiə-či-ə-ni iixəni*.

ネコは机の下を歩き回っている。 || *Kedi masa-nın alt-ı-n-da dolaşıyor*. || Muur šireen **door** ergeldež bajna. || *kəksə dəɾə pəgiə-wə-ni pulsiini*.

ネコは机の下から出てきた。 || *Kedi masa-nın alt-ı-n-dan çıktı*. || Muur šireen **door-oos** garč irsen. || *kəksə dəɾə pəgiə(-jia)-ji-ə-ni niəxəni*.

箱の中にペンがある。 || *Kutu-nun iç-i-n-de kalem var*. || Xajrcag(**an**) **dotor** bal bajna. [xajrcag(an) 「箱」の隠れた *n* は現れても現れなくともよい] || *korobka doo-la-ni ručka biini*.

箱の中へペンを入れた。 || *Kutunun iç-i-n-e kalem koydu*. || Xajrcag(**an**) **dotor** bal xijsen. || *korobka doo-či-a-ni ručka nəəxəmbi*.

その子供は家の中を走り回っていた。 || *O çocuk ev-in iç-i-n-de koşuyordu*. || Ter xüüxed ger(ee) **tojron**

güjz bajsan. [tojron は「周囲で」などの意で (小沢 (1983: 373))、アパートなどなら中の感じがするが、ゲルなら外を走り回っていてもよい、むしろ外の感じがする] || t̃ai pikt̃ə ʃoo **doo-wa-ni** tutuxəni. 箱の中からペンを出した。|| Kutu-nun **iç-i-n-den** kalem çıkardı. || Xajrcag(an) **dotr-oos** bal gargasan. || korobka **doo(-jia)-ji-a-ni** ručkawa ʃapaxambi.

家の外に人がいる。|| Ev-in **dış-ı-n-da** bir kişi var. || Ger-ijn **gadaa** xün bajna. || ʃoo **boakia-la-ni** nai biini. 家の外へ人が出てきた。|| Ev-in **dış-ı-n-a** bir kişi çıktı. || 「家の外へ人が出て来た」を直訳すると変で、その意味では単に Ger-ees xün garč bajna. 「家から人が出て来た」と言うのがふつうである。Xaša-an-y **gadna ruu** xoninuud garsan. 「囲いの外へ羊たちが出た」のような表現は可能である。Ter xün **gadagš** garsan. 「その人は外へでかけて行った」のような文は可能であるが、**gadagš** の前に基準となる場所を補うことはできないという。また、xašaa(n) 「囲い」のように上が閉じていないような空間からの移動には **gadagš** を用いることはできないという || ʃoo **boakia-či-a-ni** nai niəxəni.

家の外を人が歩いている。|| Evin **dış-ı-n-da** bir kişi yürüyor. || Ger-ijn **gadaa** xün alxaž bajna. || ʃoo **boakia-wa-ni** nai pulsiini.

家の外から人が入った。|| Ev-in **dış-ı-n-dan** bir kişi girdi. || 「家の外から人が入って来た」を直訳すると変であり、その意味には単に Gadn-aas xün orž irsen. 「外から人が入って来た」と言う。Ger-ijn **gadn-aas** üs orž irsen. 「家の外から水が入って来た」のような文は言える || ʃoo **boakia(-jia)-ji-a-ni** nai iixəni.

ネコはその二つのものの間にいる。|| Kedi o iki şey-in **ara-sı-n-da**. || Muur ter xojor jum-ny **gol-d n'** bajna. [この jumny 「ものの」の属格をとってしまうと、ter xojor jum 「二つのもの」はネコとともに主語に解釈されてしまうという] || kəksə t̃ai ʃuətəni **aldan-do-a-ni** biini.

ネコはその二つのものの間に入った。|| Kedi o iki şey-in **ara-sı-n-a** girdi. || Muur ter xojor jum-ny **gol-oor** orčixloo. || kəksə t̃ai ʃuətəni **aldan-či-a-ni** iixəni.

ネコはその二つのものの間を歩き回っている。|| Kedi o iki şey-in **ara-sı-n-da** dolaşiyor. || Muur ter xojor-yn **gol-d** ergeldež bajna. || kəksə t̃ai ʃuətəni **aldam-ba-ni** pulsiini.

ネコはその二つのものの間から出てきた。|| Kedi o iki şey-in **ara-sı-n-dan** çıktı. || Muur ter xojor **gool-oos** garč irsen. || kəksə t̃ai ʃuətəni **aldan(-jia)-ji-a-ni** niəxəni.

ネコは机の横にいる。|| Kedi masa-nın **yan-ı-n-da**. || Muur šireen-ij **xažuu-d** bajna. || kəksə dərə **jakpa-do-a-ni** biini.

ネコは机の横へ行った。|| Kedi masa-nın **yan-ı-n-a** girdi. || Muur širee-nij **xažuu tal=ruu** javsan. || kəksə dərə **jakpa-či-a-ni** ənəxəni.

ネコは机の横を歩き回っている。|| Kedi masa-nın **yan-ı-n-da** dolaşiyor. || Muur širee-nij **xažuu-d** ergeldež bajna. || kəksə dərə **jakpa-wa-ni** pulsiini.

ネコは机の横から来た。|| Kedi masa-nın **yan-ı-n-dan** girdi. || Muur širee-nij **xažuu tal-aas** irsen. || kəksə dərə **jakpa(-jia)-ji-a-ni** ʃijuxəni.／

On the Nominal Nature of Locational Expressions in Altaic Languages

Shinjiro KAZAMA

(Tokyo University of Foreign Studies)

In the present paper I examine the nominal character of locational words in the Altaic languages based on data collected by elicitation. I consider the data by contrasting them with Japanese locational words. The target languages are Turkish (Turkic), Khalkha Mongolian (hereafter “Mongolian”; Mongolic), and Nanai (Tungusic).

The present paper consists of two parts. In the first part I consider the locational character of non-locational words. In particular, I examine the grammatical character of locational and interrogative demonstratives to investigate whether such expressions as *Koko wa doko?* (lit. ‘Where is here?’) and *Watashi e kite!* (‘Come to me’) in Japanese are available in the target languages. It is found that the nominal character of locational words holds in Turkish but not in Mongolian or Nanai. It is also found that the “locationalization” of common nouns is not necessary in target languages different from Japanese.

In the second part of the present paper, I examine the nominal character of the words of relative location such as ‘front, back, above, top, under, inside, outside, between, and side’. In Japanese the locational words for the above meanings show a consistent nominal character, governing genitive case on the preceding noun and themselves requiring locational cases. I examined whether such nominal features observed in Japanese are attested in the target languages and found locational adverbs indicating direction of movement in each Altaic target language. Locational words such as *deer* ‘above/top’, *door* ‘under’, and *dotor* ‘inside’ in Mongolian show a strikingly postpositional character, to the point that they do not demand a genitive marker on the preceding nouns. Furthermore, most locational words in Mongolian do not often take a normal locational case by themselves but can take an ablative case marker, as is the case in Turkish and Nanai.

In this way, the locational words in Mongolian show the greatest adverbial and postpositional tendency, contrary to those in Japanese, which show a consistent nominal character. Those in Turkish and Nanai hold a middle position between them.

(かざま・しんじろう kazamas@tufs.ac.jp)